しずおか新聞感想文コンクール

優秀賞　小学生の部

当たり前ではない平和なくらし
松下（まつした）　ちひろさん（静岡奏小5年）

私は遺天によく父と浅間神社の裏の賤機山に登っています。記事の写真を見て、「あっ賤機山の観音様だ。」と思いました。

私が登る時は、いつも頂上まで約20分かかります。山道はすべりやすく、急な階段もあります。観音像を天八車に乗せて運んだと知って、苦労しただろうなあと思いました。記事には一九七〇年に、観音像を設置したと書いてあります。終戦した年一九四五年から二十五年間ずっと観音像を建立したいと思い続けてきた伊藤さんは、山頂に建っている観音像を見てほっとしたんだろうなと思います。

インターネットで調べると、静岡空襲は一九四五年六月十九日の夜にアメリカが静岡市内に爆弾を落とし、一九五二人が亡くなり、傷を負ってしまった人が五千人余、焼けてしまった家が約一万七千戸ありました。私も祖母から、祖母のお母さんが荷物一つで賤機山に逃げたと聞きました。一ばんたくさんの人が亡くなりました。爆弾の力はおそろしいなと思いました。

観音様は優しいお顔で笑っていたから、静岡空襲の犠牲者を慰霊しているように感じました。

そのとなりには、B29撃墜搭乗者慰霊碑もありました。敵、味方なく戦争の犠牲者を慰霊していることが、とても大切なことだと思いました。

父と運動のために登っていた山だったけど、戦争の犠牲者を慰霊しに行っていた時の感じ方が変わりました。父が戦争に行ってしまったり、爆弾が落ちてきたりしない平和なくらしが当たり前に立つ度に思い出したいです。そして、一緒に登る妹たちにそのことを教えてあげたいと思います。

賤機山観音像　経緯知って

静岡空襲犠牲者悼み　設置

地元写真館、遺志継承へ思い新た

静岡新聞8月7日朝刊

優秀賞　中学生の部

ネット社会に生きる私たち
石切山（いしきりやま）　未羽（みう）さん（静岡大成中3年）

二十一年前、日本中に衝撃が走った、和歌山毒物カレー祭りで、会場にあったカレーにより、六十三人が急性ヒ素中毒、四人が死亡したという事件が起こった。私は、テレビでこの事件を見た事があった。初めてこの事件を知ったとき、私はなんて酷い事件なんだと恐怖を感じ、慎（しん）じおそれを覚えた。しかし、この記事では事件を起こした林眞須美死刑囚の長男が手記がつづられた。

私は、今までこのような殺人事件などを聞くと、被害者や、被害者の遺族の事から事件を見ていた。しかし、この記事を読み、加害者側にも家族がいるというあたらしい事に気づかされた。加害者側イコール悪（わる）い人、という単純な事ではなかったのだ。記事によると、林眞須美死刑囚の長男は、四月からツイッターで母からの手紙の画像や事件の検証記事を投稿したり、事件以降をつづった手記を刊行したりしているという。私はこの記事を読み、加害者の家族の立場から事件を見てみようと思った。私がこの長男の立場になったらどうだろう。ある日、突然「殺人犯の子ども」というレッテルを はられ、突然児童養護施設に連れて行かれて、酷（ひど）いじめや差別を受けるのだ。十歳の子どもにとって、堪（たん）難い現実がそこにはあったのだろう。さらに、この人は幼稚園の頃親に死刑囚の子どもだと告げて、婚約破棄になったという。理不尽な事だと思うが、この反応も分からなくはないと思ってしまう。親ならば、自分の子どもが死刑囚の子どもと結婚するとなったら、心配で反対するだろう。しかし、それでいいのだろうか。実際、この人は長年苦しんでいた。死刑囚の子どもというだけで、本当は私たちと違うところなど一つもないのだ。このようなあたりまえの事実から目をそむけている人が、まだ多くいるのだろう。その結果、この人はなぐさんの苦しみを受けてきたのだ。今回気づいたように、被害者はいわれは加害者がいる。そして、その両方に家族がいて、それぞれの立場、言い分があるのだ。そして、周りの人は一方の立場、たいていは弱い立場側からの情報で物事を見てしまいがちだ。これは、とても怖いことだ。普段の学校生活なども、意見が対立したとき、一方の言い分だけが聞かないで判断するとき、物事の本質はつかえずにこない。そんなあたりまえの事を、私たちは何度も繰り返さなければならない。何かは問題が起きたとき、双方の意見を聞き客観的に判断する事が大切である。しかし、現実では難しい。特に、直接自分に関わりのない所で起こっている事などは尚更だ。それが、この反応を分かりやすくしている。手段を使って、誰もが意見を発信することができる。私たちは、このネット社会の情報を正しく収集すれば、公正な判断をする事も可能になるのではないだろうか。私は、あらゆる角度から物事を見られる目をもって生きていきたい。

自身のツイッターの画面を手にする林真須美死刑囚の長男。下は事件以降をつづった手記=和歌山市

林真須美死刑囚の長男

林死刑囚の長男が手記

和歌山毒物カレー事件　母の無実を訴え

1998年、和歌山市で夏祭りのカレーに猛毒のヒ素が混入され、4人が死亡した毒物カレー事件。翌年、林眞須美被告が公判で、ツイッターのアカウントを開設し、今月に手記を公開した。

いじめ、差別つづる

在宅起訴されてから、周囲の家族からの手紙や、支援者からの手紙などを受けるようになった。手紙の内容は、「がんばってください」、「あなたの無実を信じています」などの応援メッセージが多かったという。

林さんは、「(被害者の)遺族や事件の関係者に対する謝罪の気持ちは、今も変わらない。ただ、(私の)家族が(事件)に関係していないことを、(私の)家族の立場から伝えたい」と、手紙を公開した理由を説明した。

林さんは、「(私の)家族は、(事件)の前から、(私の)家族に対する(いじめ、嫌がらせ)があった。